

達せるかな、この詩集

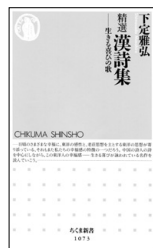
本書『精選漢詩集——生きる喜び』は、新書であるにもかかわらず、二冊分はあろうかという厚さから成る。しかもこのボリュームは、あれやこれやと無作為で詰め込んだ、垂れ流しの結果ではない。「生きる喜び」という一貫したテーマの下に、選び抜かれた名篇一七〇首だけが体系的に排列されている。漢詩の本は数多く、それだけに切りくち次第では凡百に陥る恐れがある。「喜び」に貫かれた本書は、その良質のテーマのみを味わってゆけるので、読後感は格別であった。

著者下定雅弘氏の研究業績は膨大にのぼる。その中でも、中国知識人の基層をなす考え「兼済」「独善」に関する解釈は、氏の大きな足跡の一つであり、多くの研究者にヒントを与え続けている。「兼済」は、〈公けの立場においては、人々が安定した生活を送れるように仕事をする〉という考え。「独善」

下定雅弘著
精選漢詩集

——生きる喜びの歌

佐藤 浩一



新書判 384頁
筑摩書房
[本体 1000円 + 税]

は、もともと〈志を得ない時期は仕官できるその日に備え、我が身の修練に努める〉意味であったが、白居易からは〈プライベートな立場において、快適な境地で生活を送る〉という考えに変わる。この「兼済」と「独善」、すなわち、仕事が充実し、プライベートも歓びで満たされていれば、人はそれこそを「幸福」と呼ぶはずである。本書でもその観点から、「仕事の喜び」「愛の喜び」「食べて、飲む」「趣味の喜び」「四季折々の自然の喜び」「老いの喜び」——以上の六章にわたって、それぞれの喜びを詠った詩が精選されている。

本書で引用されている詩人も、印象的である。陶淵明・白居易・蘇軾を中心に、李白・杜甫、そして菅原道真・新井白石・浦上玉堂といった日本の漢詩人たちも取り上げる。下定氏によれば、陶淵明・白居易・蘇軾は、中国で幸福を自覚的

に詠った詩人であり、また李白と杜甫は、苦しい人生の中でも喜びを追求していたという。この人選は、成功していると思う。むやみに他の詩人にまで際限なく広げると、喜びの漢詩は豊富であるがゆえに、拾い読みだけに終始してしまうかもしれない。本書のように、幸福を自覚的に追い求めた第一級の詩人に限定すれば、なぜ彼らが幸福を詠うのかまで掘り下げることが出来る。道真ら日本の漢詩人の引用詩も良く見ると、陶淵明や白居易に影響を受けた作品であることに気付く。つまりこの本には、これまで下定氏が研究し続けてきた陶淵明や白居易という太い一本の幹が貫かれている。

ところで、評者の指導教授であつた松浦友久（一九三五—二〇〇二）も、下定氏と同様の考えを述べていたことを想い出す。生前、松浦教授は、「陶淵明・李白・白居易・蘇軾」を一つの系譜としてまとめる案を練っていた。もしも本書を手にしたとならば、莞爾として賛同の意を表したことだろう。第一章「仕事の喜び」は、「兼濟」すなわち仕事の充実を詠った詩がならぶ。評者にはとりわけ、農作業に関わる詩の紹介が、心にのこった。陶淵明といえは隠逸詩人と呼ばれてきたが、田園詩人と呼ぶべきだと下定氏は唱える。「隠逸」とは官界を表と見て、そうでない生活を裏と見る語であり、陶淵明はその逆で、官界を絶ち、田園に自己の生きる道を求めた、

というのがその理由である。この主張は大いに説得力を持ち、今後の陶淵明研究で意識され続けることだろう。

陶淵明については、彼を徹底した俗物としてとらえ、官僚になって出世したがっていた自己中心主義者である——と位置付ける研究が以前あつた。評者はその視点の鋭さに覚醒する思いがした一方で、しかしまるで醜態をあばきたてるかのようで、後味の悪さを覚えたりもした。ひょっとして陶淵明のことが嫌いなのでは、とさえ思えた。下定氏は違った。超俗の淵明像を壊そうとするその研究に対して、「それを言つて何になるだろう。およそ中国の知識人で官界に志を持たない人間などまづいない。名声を求めるのもごく普通だろう。自己愛こそはすぐれた表現を生み出すエネルギーの源だ」（『陶淵明と白楽天——生きる喜びをうたい続けた詩人』角川選書、二五四頁）と述べる。実際この視点を持たぬ限り、陶淵明がなぜ官界を目指したのか説明はつかないはずであり、本書でも下定氏は特に紙幅を割いてこの点を明らかにする（三二、四六―四九頁）。とりわけ、日本との比較をまじえての中国における統治システムの解説は、周到であり大変わかりやすい。

次いで引用される杜甫の農耕詩も、心に響く。杜甫の後半生は決して愁いだけではなく、明るさも失つてはいない。その背景の一つには農作業の喜びがあつたはずである。この杜

甫の農耕詩は、次章の「草花への愛」に配置しても良さそうだが、農耕詩の祖、陶淵明と同じ系列に据えて論じること、杜甫は遠く都を離れた田園でも喜びを見出せていた——という、より正確な姿が描き出せていよう（なお杜甫の農耕詩については、古川末喜氏に一連の考察があり、たいへん参考になる）。

第二章以降は、「独善」すなわち個人の快適・快楽の喜びを詠う詩がつづく。第二章「愛の喜び」では、男女の愛・子供への愛・動物への愛・草花への愛をあつかう。男女の愛については、漢代以降は淫らなものとしてタブー視され、李白・杜甫、そして中唐の白居易まで歌われなくなる。その間、中国の知識人たちは、艷歌・閨怨詩という虚構による女性の美を詠うことで、抑えがたい女性への関心と愛を表現してきた（七七頁）——という説明は、初めて知る一般読者にとっては、刺激的な指摘であろう。ただしこの特殊な事情も、現在の中国古典研究者にとっては既知であるはずなので、「大きく修正されるべき」という心配には、恐らく及ぶまい（ご存知なかった方は、本書をご覧のうえ理解を深められたい）。

いったい李白・杜甫・白居易ら大詩人たちが、なぜこれほどの愛にあふれた詩を詠いあげていたのか。下定氏はそこに、並はずれて強く豊かな「共生の思想」を見ている（八八、一〇一、一二九、一九四、二〇七頁）。すなわち、自分への愛

と、生きとし生けるものの全てを自分と同じに見て、実感する思想と感情を、精神の根幹としていた。それが彼らに共通する精神であり、それゆえに、女性・子供・動物・草花といった多くの対象にまで愛がそそがれてゆくのだという。

同感である。そしてこの「共生の思想」を踏まえることによって、下定氏が肯定する「自己愛」も、薄っぺらなエゴイズムではなく、他者に注ぐ愛と同質の、もっと豊かで、もっと高次の精神状態を指すことが理解されよう。

第三章「食べて、飲む」は、一〇〇ページを超える紙幅であり、本書の三分の一を占める。食欲こそは人間の三大欲望の一つである。そのぶん生理的な感覚がむき出しになりやすく、詩的美しさを損ないかねない。それを詩として詠い上げたのが、陶淵明・杜甫・白居易であった。本章が紹介する美味礼賛の詩は、彼らの詩人としての力量を、あらためて思い知るに充分であった。堪能できた。

第四章「趣味の喜び」では、音楽・画・書の詩が扱われている。とりわけ陶淵明の「無弦琴」に関する解説は、必読である（二六四頁）。淵明の琴には弦が無かった、という伝承が後世広まったが、まさか無かったはずがない。現実にはあった。なぜそんな逸話が生まれたのか、その意味するところを下定氏は平易に教えてくれる。

第五章「四季折々の自然の喜び」では、『和漢朗詠集』収録の漢詩が紹介されている。異常気象の昨今、日本で本来味わえるはずの四季の移ろいが、本章を読むと、やはり大切に思えてくる。

第六章は、「老いの喜び」である。老いとは忌まわしいことだと思われがちだが、下定氏は、老いには老いの成熟と聡明、生きる味わい深さを見ている。その上で、老いの喜びを詠った白居易の詩をこの章では紹介する。まだ当分死ぬつもりのない評者にとって、老境は想像の領域であるけれども、想像してチラつくのは、やはり近づく死への恐怖である。それを白居易は快く迎え入れていた。彼の「独善」に、羨ましくも共感したのが、この章であった。

玉璧の微瑕らしき点を一つだけ。杜甫の「曲江」を満足感が漂う詩と捉えるのは（二四五頁）、違和感を覚えた。やはり「曲江」は、杜甫には珍しい自暴自棄の詩と見るのが妥当であろう。長年の浪人の末、ようやく左拾遺という帝を諫める官職を得た杜甫であったが、正直者の彼は、本当に帝を諫めてしまい、任官から僅か二週間ほどで帝から嫌われてしまった。「曲江」は、そんな失意の中で詠まれた作品であろう。

むしろ右は、本書の価値を損なうものではない。以下、さらに惹かれた点を強調しておきたい。それは「訓読」である。

最近、下定氏から、訓読の愉悅について考えている旨の私信を得た。本書でもそのスタンスが反映され、美しい訓読がどこされている。訓読はアリのバイの飾りつけではなく、調音的快感を伴ない、それ自体が享受の対象たりうる。下定氏は高校時代から「長恨歌」を誦するほどであり（『長恨歌——楊貴妃の魅力と魔力』勉誠出版）、そうした愛唱も、訓読の美文調なかりせば成立しがたい。

本書の最後にて下定氏は、白居易が人生を回顧した「達哉楽天行」詩を引用し、「白居易のように、七十歳の時に、よくやったと自分をほめることができる自分でありたい」と述べて（三六五頁）、詩人への愛と自己への愛とを同一視する。これは安易な自己満足ではない。下定氏は別な機会でも当該詩を引用し、「白居易が自らの人生に満足し、自らをほめあげることができるのには、それだけの、長い人生における自己の言動と心への観察があり、反省がありました」（『白楽天の愉悅——生きる愉悅の輝き』勉誠出版、一三五頁）と述べている。つまり言動と心への観察があったればこそその愛であり、その観察とは、これまで下定氏が積み重ねてきた論著の数々がこれに当たろう。論著という兼済と自己愛という独善が、ならんで果たされようとしている幸福を、ここに見る思いがする。

（さとう・こういち 東海大学）